

日蓮の五義判に関する一考察

——師自覚との連関を通じて——

渡 辺 彰 良

はじめに

日蓮が開説した五義は、客観性が要求される教判であるにも関わらず、「師」の主体性によってはじめて成立するという特異性がある。一方、日蓮は自らを「法華經の行者」「遣使還告」として仏教史の中に位置づけ、師の自覚を持つて宗教活動を行った。五義が師自覚とどのような関係をもつのか、その関係を考察したい。

一、五義の定義

五義とは、「教」「機」「時」「国」「序」⁽¹⁾の五項目をいう。この五項目から釈迦一代の教えを比較し、最も優れた教典を選択しようとする教判が五義判である。

五義が初めて発表されたのは、『教機時国鈔』で、その後『顕謗法鈔』『南条兵衛七郎殿御書』などで再説され、『観心本尊抄』を経て、『會谷入道殿許御書』において完成された

形で広説された。

古来、日蓮教団では五綱と三秘が中心をなす教義と宗旨として重視されてきた。日蓮の宗教の中心とされる三大秘法を導き出す教義として五綱が述べられた、とされたのである。

五義に関し、先学の見解をいくつか見たい。田中智学氏は、建宗の理由とも言うべき教義の論究として判が必要であり、本宗の判、すなわち教義は「五綱」である、と述べている。⁽³⁾

望月歆厚氏は、五綱判を本宗教相判釈と定めて差支えないと信ずる、と述べる一方、五義に関する遺文叙述が教相としては十分に整理されていないことを、「遺文に拠っただけでは十分それ（日蓮宗の教相であること）を確保することは出来ないと思う」、と指摘している。⁽⁴⁾

茂田井教亨氏は、五義はその扱い方や発表の度合が年次を経るにつれて変化を示しているので、五義を純粹な教相とするには弾力性が強すぎる、とし、日蓮聖人における知教者・弘経者としての自覚的立場を示すものである、と論じている。⁽⁵⁾

これらの研究を踏まえて遺文を見ると、諸経を比較して教典を選択する点からは狭義の教判と言える。しかし、宗旨を立てる根本教義として考えたとき、遺文の五義に関する直接的記述が不十分である感は否めない。宗旨を導く教義として五義を位置づけるには、さらなる研究が必要であろう。

こう考えるとき、茂田井氏の、自覚的立場を示すものである、との主張は新たな視点を提供してくれる。五義は、日蓮の師自覚と連関してこそ、究明されると考えられるのである。

二、五義判に関する遺文記述

前述のように、日蓮遺文における五義記述には年次によって差異が見られる。その初出は『教機時国鈔』⁶⁾で、弘長二年、配流の地伊豆伊東において述作された。一連の迫害の結末として流罪せられた日蓮は、これを法華経弘経者が受ける必然の苦難と捉えている。そして、この迫害を契機として五義を發表したのである。本鈔では「序」のみで「師」はないが、述作の動機からも「師」が内包されていることが推測される。本鈔では「教」「機」「時」「国」「序」の各項に渡って、弘める仏教を選択すべきであると主張する。そして、末法の日本では一向法華経を弘めるべきであると結論づけられるが、法華経が選択される理由については明確にされない。

そこで、次の段において、「知教」「知機」「知時」「知国」

「知序」が述べられる。「法華経は一切経の中の第一の経王なり」と知るは、是教を知る者也。」「(二四三頁)」とあるように、知教者の主体性の上に、法華経こそが弘めるべき教である、との結論に到達する。

逆に言えば、知教者の存在無しには法華経弘経は実現し得ない。教判として考えたとき、「教」「機」「時」「国」「序」の各項は客観的である。しかし、その判定基準が知教者にある以上、その結論は知教者の主体性に委ねられることになる。本鈔では、日蓮が法華経の行者であるとの自覚が暗示されており、日蓮が知教者の役割を担うとの意志が感じられる。

日蓮が知教者の役割を担う以上、その主張する五義という教判は客観性が揺るがざるを得ない。

『頭誦法鈔』では弘経者の用心という形で五義が再説される。「教をしれる者」(二七二頁)を強調するところも『教機時国鈔』と同様である。

『南条兵衛七郎殿御書』では、法華経への入信を勧める形で五義が叙述される。本書で日蓮は「日本第一の法華経行者也」(三二七頁)と宣言している。五義を規定する知教者には触れられていないが、この宣言は知教者として自己を位置づけるものといえる。

五義が大きく変化するのとは『観心本尊抄』である。本抄では、いわゆる三大秘法を開示する中で、五義各項について問

答を繰り返しながら論じている。特に「教」については、五重三段を説いて一代仏教を重々に分別し、寿量文底・神力別付の要法、題目の五字を選択している。「機」は、「時」とともに、末代凡夫ということが強調され、「師」である地涌の菩薩によって、妙法五字を譲与される、と結論づけられている。本抄では五義という教判は明示されないが、「此時（時）地涌菩薩（師）始めて世（国）に出現し、但妙法蓮華經の五字（教）を以て幼稚（機）に服せしむ」（七一九頁。）は筆者の文を見ると、ここに五義が完成したことが理解される。

『観心本尊抄』で完成した五義を整理した形で述べているのが『曾谷入道殿許御書』である。本書において「序」が「師」へと改められている。これは、日蓮が佐渡流罪を通じて師自覚を確実なものとしたためでもあるが、文永十一年の蒙古襲来を受けて師的自覚を再確認したことなく無関係ではないと思われる。五義各項について概説すると、「時」は末法、「機」は仏種なき謗法の機、「国」は辺国・白法隠没の国と述べ、法華經を弘通するべきと主張する。そして、「教」は妙法蓮華經の五字・名体宗用教の五重玄とし、布教すべき「師」として、地涌菩薩、中でも上行等の四大菩薩をあげる。本書は五義の集大成といえる。⁽⁸⁾

以上見てきたように、日蓮の五義叙述はその宗教活動を通じて変化している。特に「機」は、謗法を強調する点が目立

つ。また、「教」は、単に法華經から、妙法五字へと大きく変化している。そして、その教えを担う「師」として地涌菩薩が規定されるに至っている。⁽⁹⁾

三、日蓮の師自覚について

では、日蓮の師自覚はどのように深化していったのか。略述したい。

自覚というものは何の根拠もなしに生まれるものではない。日蓮においては、布教に伴う様々な迫害や『立正安国論』における他国侵逼難の予言適中が宗教的自負となり、自覚を深めていった。これは、単に経験が自己を鍛えたということではない。日蓮は法華經を末法に向けて説かれた未来記と捉えており、この未来記を身を持って読むことで法華經の真实性を証明することにもなり、また、自身を法華經に乗せられたものとして規定することにもなると考えている。つまり、法華經を色読することが、法華經に予言された如来使であることの証明となり、自覚を深めるのである。

初めて師自覚が明確に示されるのは伊豆流罪後である。『四恩鈔』においては「法華經の持經者」、「教機時国鈔」においては「知教者・法華經の行者」として、自己を規定する文言が見られる。

そして、小松原法難後の『南条兵衛七郎殿御書』に「日蓮

は日本第一の法華經の行者」(三二七頁)との宣言がなされる。

龍口法難・佐渡流罪は日蓮の自覚に大きな影響を及ぼした。佐渡において『開目抄』『観心本尊抄』が述作されるが、両抄はそれぞれ人開顯・法開顯とも称され、法華經の行者自覚・本化の菩薩の自覚が示される。

蒙古の国書到来・蒙古襲来は『立正安国論』の予言⁽¹⁰⁾を現実のものとした。それに伴い、日蓮の師自覚も深まったことが、『撰時抄』『顕仏未来記』などの著述から読みとれる。

四、師自覚の表出と五義の変化

五義と師自覚が密接な関係を持つことは、五義が知教者という師的存在によつて始めて成り立つことから理解される。五義が初めて発表された『教機時国鈔』において法華經の行者自覚が暗示されることから、知教者の役割を担う者は法華經の行者日蓮である、との自覚が伺える。

日蓮の師自覚が深化するに連れて五義叙述が変化することは、知教者の役割を考えれば当然といえる。日蓮は佐渡流罪を契機に本化の自覚を確固たるものとしたが、その自覚を示す『観心本尊抄』において五義が完成したことも、これを裏付けるものである。『曾谷入道殿許御書』において、初めて「師」を明示したのも、蒙古襲来の予言適中に伴う師的意識の意揚が理由の一つと考えられる。

このように、師自覚に伴つて五義叙述が変化しているが、「時」「機」「国」においては本質的な変化が見られない。「教」の変化も、「五重相對」「五重三段」などの教判を依用しなければ、客觀的に説明することは難しい。

つまり、五義の判釈の基準が「師」の主体性に委ねられてしまい外在しないという点では、『教機時国鈔』においても『曾谷入道殿許御書』においても変化していないのである。

五、客觀的教判と主体的自覚の結合

日蓮は、五義を指して「弘經者の用心」とする場合がある。法華經の行者が布教するにあたっての心得、を意味する。つまり、遺文における五義叙述は必ずしも教判としての体を作しているわけではないのである。

日蓮が述べる法華經の行者は実は知教者でもあるから、「弘經者の用心」としての五義は、教判としての五義と矛盾しない。しかし、それをそのまま一般的な教義とすることは出来ない。

「師」の主体性に依存する五義は、客觀的教義とは成り得ないのだろうか。ここで、「師」について検討する必要がある。「師」とは知教者であり、それが法華經の行者としての日蓮であることは既に述べた。

日蓮の自覚は単に宗教者個人としての自負ではない。むしろ

ろ、自己を滅し、仏の教えの中に自己を投入することで得られた境地である。「法華經にのせられたる者」との表白や、自己を「遣使還告」とすることから分かるように、法華經を通して初めて師の自覚が成り立つのである。つまり、日蓮の師自覚は經典を離れては存在することが出来ない。師自覚は法華經によって客観性を与えられているのである。

五義の客観性を維持するには、知教者を客観的存在へと昇華することが要求される。日蓮の宗教の特質は、実はこの点にある。自身を一介の僧侶から、法華經に予言された者へと昇華することで、法によって規定された知教者という、客観的存在へと昇華するのである。

おわりに

五義は日蓮の師自覚の上に初めて成立すること、そして、その師自覚は經典（法華經）を通じて客観性を要求されることが考察できた。しかし、遺文をさらに精密に調査し、五義と師自覚の関係を明確に位置づけることが必要であろう。今後の課題としたい。

1 なお、日蓮は「序」とは述べず、「教法流布の前後（先後）」という。しかし、ここでは先学の例に従い、これを「序」と呼ぶ。

2 五綱は五義の異称

3 『日蓮聖人の教義』

4 『日蓮教学の研究』

5 「日蓮の五義に於ける二・三の問題」『印度学仏教学研究』五巻一号所収

6 本書の真蹟は伝わっていない。しかし、『日祐目録』にも記載されており、真偽は問題ないとされている。録内御書二六巻にも収録され、古写本としては行学院日朝のものがある。

7 なお、『開目抄』では五重相対をもつて「教」を論じている。

8 このほか、五義各項について述べる遺文として『顕仏未来記』『法華行者値難事』『法華取要抄』『撰時抄』などがある。

9 なお、『教機国時抄』発表以前の「五義」記述に関して、浅井円道氏の綿密な研究がある。（『五義判の形成過程の考察』『大崎学報』一一八号）

10 日蓮は蒙古襲来を他国侵逼難の予言適中と主張している。

※文中に示した日蓮遺文はすべて立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本日蓮聖人遺文』に拠り、（一）内にそのページを記した。

（キーワード） 日蓮、法華經の行者、五義、自覚

（立正大学非常勤講師）